

## 年間第26主日

福音朗読 ルカ 16・19-31

2022.9.25

カトリック高円寺教会  
主任司祭 高木健次神父

今日のたとえ話の中で、お金持ちと貧しいラザロと出て来ました。イエス様の時代の豊かな人たちが食卓でいろいろ食べて、イエス様の時代というのはスプーンとかフォークとか無いから大体手で食べますでしょ。で、その手が油になったり汚れたとして、その手を何で拭っていたのでしょうか。次の三つの中から選んでください(笑)。1番：紙、2番：布、3番：パン。別に手を挙げなくて良いんですけど(笑)、正解は3番のパンなんです。紙はまだ発明されたかされないかの頃だし、まだイエス様の地中海地方には伝わっていない。布も貴重なんですよね。布で拭いて水で洗えば良いと、でも布も貴重だし水も貴重なんです。だから、あと残ってるのはパンなんです。パンで手を拭う。

先週大司教様がいらっしゃって堅信式がありましたけども、教会の中でもその伝統は、わたしが神学生の白柳大司教様の頃まではそれをやってました。大司教様がみんなに油を塗った後に手を洗うのが、先週はお手拭きを侍者の人が持って来てくれましたけど、レモンのスライスとパンの切ったのがあって、それで手を拭かれてました。日本だったらその必要はなくて、もったいないからもうそれは止めたわけです。

そんな感じで、パンで手を拭っていたんだそうです。で、それを間違えて食べるといけないから、テーブルの下に落としていうことなんです。だから、ラザロが食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていたが誰もくれなかったっていう、この「食卓から落ちる物」というのは、手を拭いたパンなんだって、(ほんとかな、でもパウロ会の聖書の先生が言ってたからほんとなのでしょう。「講釈師見てきたような嘘を言い」じゃありませんけどね(笑)、わたしは知らないけど、でも先生が言ってたんだから)。そうらしいんですね、その文化として。

そんなことで、このたとえ話の中ではそう思っていたラザロに、でもそれさえもくれなかったけど、じゃあ、この金持ちが、もし自分たちが手を拭って床に捨てるはずのパンを集めて、「ラザロは腹が減ってるんだらうからこれを食べなさい」ってあげたとして、そうしたらそのお金持ちは死後アブラハムの宴席と一緒に連なっていたのでしょうか。あげたんだから、と。

わたしたちは、それはないだろうなあって思いますよね。だって、自分たちが食べない物を、食べ物とみなしてない物をあげて、そして良くやってみたいに思ってもらっても困るなってことがあるでしょう。だけど、現代でもそういうことって往々にしてあり得るし、わたしたち自身ももしかしたらしてしまうかもしれないんです。

インターネットのニュースを見てたら、アフリカに世界中から毎年20億着くらいの古着が送られて来る。だけどほとんど使えない物とかでゴミになって、その処分費用が大変なんだ、と。だから二重の面倒になってるんですね。それは、アフリカのことだけじゃないですね。

今日、カトリック教会では「世界難民移住移動者の日」です。ちょうどわたくしが「カトリック国際センター」と言って東京教区の外国人支援の部門で携わらせていただいていますけども、いろんな支援物資とかお願いします。でも、中にはそういう衣類とかあるいは賞味期限の切れた食べ物なんかを寄付してくれる人がいる。悪気はないかもしれないけれど、「これ食べられるから」、と。だけど、例えば賞味期限が切れている物っていうものを、自分は食べますよ。缶詰だったらもう一年ぐらい切れちゃってる物もあります。だけど、それを支援物資として見ず知らずの人から受け取るという人たちは、やっぱりそこに「あなたたちはこの物で十分なんだ」というようなメッセージを受け取っちゃいますよね、賞味期限の切れた物を受け取るのは。食べられるからと言って。食べるんだったら、それはご本人が召し上がったほうが良いです。

古着なんかでも、バザーの整理の係をしたことのある人は良くご存知だと思いますけど、古着ってほんとに厄介です。自分がもう着ないような、あるいは汚れの付いたようなとか。(今日だけ文句を言わせてほしいです。)整理がなかなか大変なんですよ。だから、公な形で、オープンな形で「古着を募集してます」とってなかなか呼び掛けづらいところがあります。わたしたちのセンターは、直接知り合った人とか、顔と顔を知っている間柄の中でいただくっていうように、特に古着は、しています。それというのも、信者でない人でも時々関心を寄せてくださいますけど、遺品整理とかお家の整理とか、そういうような中で持って来られるっていうことがあって、自分が使わない、あるいは要らない物を、「誰かの役に立てば」という気持ちがあるのかもしれないんですけども、例えばうちの親なんかでもそういうセンスが。例えば昔の使いかけの鉛筆を集めて持って来てくれる学校とかあるんです。それはもう何十年前の発想。でも、わたしたちが支援しているのは日本社会に生きている人なんです。やっぱり、鉛筆でもなんでもあれば助かるだろうと思うけど、でも他の子と一緒におんなじように学校に行ったりする。その中で、ただでさえ人種差別とかの中で、使いかけの物ばかりっていうのはやっぱりね。ほんとにその人を大切にしているっていうこと

が伝わらないんです。だからわたしたちは、よくよく振り返ってみる必要があるなって、自分がもらってほんとに嬉しい物を他の人のために役立てるっていう気持ちになりたいなと思います。でも、ほんとに気持ちはあるんだけど、でもどういう物がいいのか分からないっていうこともあるかもしれません。物だけじゃない。自分の時間というの、自分のためには時間をいくらでも使うんだけど、他の人のためには使う時間がないっていうことになっちゃったりする。

だから、教皇様がお互いに無関心を乗り越えて分かち合うということと呼び掛けていらっしゃいますけど、わたしたちがそのように、わたしたち自身がイエス様を通して永遠の命を分けていただいている、わたしたちがもらうべきものじゃないのに、っていうその信仰に基づいて生きているならば、やっぱりお互い同士で分かち合うということを真摯に考えていきたいなあとと思います。

アブラハムの宴席と陰府のさいなまれている金持ちの間には深い淵があるんだってたとえ話の中には出て来ました。たとえ話の中の深い淵は、死んだ後だけじゃない。今のわたしたちの社会の中にも人と人との間に大きな深い淵がある。でも、それを乗り越えるための橋を架けるためにイエス様が復活して、わたしたちと共に歩んでくださっている。「誰かが復活してやって来ても耳を傾けないだろう」ってアブラハムは言ってる。そうかもしれない。でも、そこに希望をもって、イエス様は復活してわたしたちと共に歩もうとされる。呼び掛けていらっしゃるわけです。だから、そのイエスに出会ったわたしたちが、人と人との間にある深い淵に橋を架けるイエスの働きに加わることができますように、一人ひとりの中にイエスとの対話を保ち、そして回心の恵みを頂きたいなと思います。

今日、世界難民移住移動者の日になってます。外国人だけじゃないんです。わたしたちが多様なお互い同士を助け合いながら、神の国を目指して良い社会を造っていく者でありますように、イエス様の導きと、そしてイエス様から与えられる勇気を願いたいと思います。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>